

第1回資源管理方針に関する検討会
(スケトウダラ全系群及びズワイガニ オホーツク海南部・北海道西部系群)
【議事概要】

1. 日程 令和2年8月20日(木)～21日(金)
2. 場所 TKPガーデンシティ PREMIUM 札幌大通
3. 出席者

水産庁:神谷水産庁次長、魚谷資源管理推進室長、晝間管理調整課補佐、
竹川管理調整課補佐、上田漁場資源課補佐ほか

水研機構:森部長、塚本副部長ほか

このほか漁業者、漁業者団体、研究者、行政官、報道関係等計約 55 名

4. 概要

≪1日目:8月20日(木)≫

(1)水産庁より、資料4を用いて改正漁業法下における新たな資源管理について説明。

【主な議論】

- 資料4に、今回の検討会で、資源管理目標案の説明とあるが、あくまで案ということ
でよいのか。議論の結果別の目標になることもあり得るのか。

(2)水研機構より、資料5-1に用いて資源評価に係る基本事項について説明。

【主な議論】

- 資源評価が重要であり、MSYに依存してよいかは、外部のレビューを受ける必要があるとの説明があったが、資源管理に用いる前に行うべきではないか。MSY推進派の研究者、逆に反対の立場の有識者を入れてやったのか。
- H26年の資源管理のあり方検討会の議事録を読んだ。当時はIQとITQの議論だったが、賛成派と反対派の有識者を呼んで議論をしていた。密度効果に依存したMSYを最適とする有識者がいるなら、名前を教えて欲しい。密度効果以外の要素が大きい。コンピューターでのシミュレーションも変動が大きい。こういった議論がきちんとされないと、漁業者の理解が得られない。結論に至るまでの議論が知りたい。
- 海外で、コンピューターで、というと分からないのでごまかされた気分になる。海外でも懐疑的意見があるのでは。
- MSYの活用は分かったが、漁獲量規制につなげることにした有識者の議論が知りたい。海外は、漁業に歴史もなく漁業者団体もないので、自主的管理ができないから漁獲量規制しかないのでは。
- MSYは万能ではないので、運用においては柔軟にしてほしい。
- MSYの議論は、既に決まった話と言われると、漁業者としては納得しづらい。MSYに合った資源がどれだけあるのか、合わない資源があるという有識者もいる中で、合う合わないに関わらず何でもMSYを突っ込もうとしている印象。日本海のスケトウダラは増えている中で、MSYが必要か疑問である。

(3) 水研機構より、資料5-2を用いて、ズワイガニ北海道西部系群の資源評価結果について説明。

【主な議論】

- 自社で獲っているが、まさにベニズワイ操業の付随的な漁獲であり、評価に対して特に異論はない。

(4) 水研機構より、資料5-3を用いて、ズワイガニオホーツク海南部の資源評価結果について説明。

【主な議論】

- 2014年に日露のIUU漁業防止協定が発効し、ロシア船の違法設置漁具が放置されたため、ズワイガニを狙った操業ができなくなった。その後違法漁具が撤去され、再び操業できるようになった。この重要な歴史を資料に残して欲しい。

(5) 水研機構より、資料5-4を用いて、スケトウダラオホーツク海南部系群の資源評価結果について説明。

【主な議論】

特段の意見・質疑なし。

(6) 水研機構より、資料5-5を用いて、スケトウダラ根室海峡系群の資源評価結果について説明。

【主な議論】

特段の意見・質疑なし。

(7) 水研機構より、資料5-6を用いて、スケトウダラ日本海北部系群の資源評価結果について説明。

【主な議論】

- 2017年度までのデータと、2018年度までのデータを使っていることは分かったが、データを更新した上で会議を開くべき。日本海のスケトウダラは漁業者が努力して漁獲圧を下げてきた。減船、漁獲を止めたことが大きな漁獲圧の低下をもたらした。一昨年はABCが上がったのに6.3千トンという科学的根拠に基づかない不本意なTACを飲まされた経緯がある。
- 漁業者にとっては目の前の漁獲が関心であり、生活に影響する。不確実性があると言われると信頼ができなくなるので、採用しない方がいいのでは。
- TACの根拠はABC、日本海スケトウダラでもこれらが一致して安心したところだった。MSYでやった方が信頼できるということか。MSYは学者が海外から持ち込んだもので、その有効性に納得できる説明をきいたことがない。
- MSYの有効性を、自分たちで実験されているように感じる。成功例はあるのか。
- 自然の環境要因は加味されるのか。
- 決めたらずっと変えない訳ではない、と理解して良いか。
- パブコメされている基本方針(案)によれば、限界管理基準値を下回った場合、資源

再建計画を作成し、10年で目標管理基準値に回復させることになり、今回の計算では禁漁となる。これまでBbanにならないよう頑張って、Blimitに回復させてきたのに、禁漁となれば今まで何をしてきたのかとなる。目標の水準が高すぎるのではないか。

- 資源評価や目標の設定については、議論に参加して意見を出してきた。しかしながら、これで漁業者の理解が得られるかについては議論が割れた部分。今回のSH会合の結果として、目標の定め方も柔軟にすることも一案では
- 目標設定によっては禁漁になりうるものであり、生業としている者の生活が大きく影響されるので、然るべく手順を踏むべきと考える。海外でやってるから日本でやれとしか聞こえない。MSYがいいのか、有識者をしっかり入れて、議論を経るべきである。最新のデータは、コンピューターを駆使して評価に反映して示すべき。
- 現在までの調査で2020年までの加入量は推定が可能となっており、再生産関係は変わらないだろう。よって5年経っても変わらないだろう。MSY推定の手法を、5年待たずに見直すべき。レジームのシフトも考慮すべきである。
- 親子関係を使ってMSYを推定する話はかなり科学的である。親子関係の図だけでは、どのような道筋でMSY水準に到達するか、また限界管理基準値に回復するまで、漁獲圧を下げる必要があること等が、分かりにくいのではないか。

(8)水研機構より、資料5-7を用いて、スケトウダラ太平洋系群の資源評価結果について説明。

【主な議論】

- 獲り控えして、実際の漁獲実績をTACより少なくした時に、将来的な予測とTACにどのような影響を与えるか。
- 獲り残したTAC残量について、翌年に繰り越すことを要望してきた。クロマグロはできるのに、スケトウダラでできない理由は何か。
- 北方四島で産卵している可能性があるのではないか。

《2日目：8月21日(金)》

(4)水産庁より、資料6を用いて、漁獲シナリオを検討するに当たって考慮すべき内容について説明。

【主な議論】

- 資料中で「実行上の柔軟性を高める措置」とされている措置は具体的に何にか。
- スケトウダラ日本海系群の目標管理基準値(MSY水準)は、過去に実現したことがないものであり、高すぎて、個人的に認められない。
- スケトウダラ太平洋系群で、 $\beta = 0.9$ と1の間で、50%を上回る確率で達成できるよ β を計算できるのではないか。
- 水研機構の全体的なルールで計算した結果のMSYであり、道総研としては異論も示したが、水研が決めたもの。個人的には、科学的な観点から、水産庁はこの管理プランを採択すべきでないと考える。特にホッケースティック折れ点の根拠となっているデータの質について疑念がある。資源量が多くとも再生産効率が低くなっていることについては、水研機構と道総研で同じ意見。直近の資源量については、担当の仮

定の置き方で2割も変わる。そのような不確実性の中で、6千トンや7千トンの漁獲の変動を想定する政策は適切でない。数年間、漁獲量や漁獲圧を固定するという選択肢も含めるべき。今のやり方では、漁業者の理解が得られず、水研機構が信頼できないという話となる。

- MSY という概念は理解できるか、漁業者にとっては目標を上げられて、今までの努力が何だったのかと感じる。北海道の漁業者は様々な手法で管理に取り組んできた。管理開始後の数年で2万トンTACが減るのは、MSYが高すぎる証拠。諸外国への説明が重要というが、スケトウダラは国内で系群管理している。Blimitの管理が失敗だったのなら、MSYもいずれ失敗とされるのでは。まずは1つでも国内におけるMSYの成功例を作るべき。MSYを使った管理には反対と意見を表明したい。
- スケトウの日本海系群は、他の魚種・系群と管理の手法をそろえる必要無い。理由は道総研が説明したとおり。漁業者の生活、自主的管理を尊重して欲しい。
- やはりMSYの導入は拙速と感じる。資源評価の精度を上げて欲しい。期中改定や再評価を含めて、柔軟に対応して欲しい。
- 達成確率50%という数字について、科学的根拠は何か。
- 全国的な資源評価のルールを優先して、資源の地域的な特性を反映せずに、評価したのではないか。評価の過程は透明性をもって進めて欲しい。
- 管理目標値の妥当性を、科学だけでなく、業界の意見も聞いて検討する場のはずだが、水産庁は科学的根拠を盾に、変えるつもりが全く無いように聞こえる。
- 目標は科学だけで決めるという意味か。目標を定めるにあたって、我々の意見を反映するのか。不確実性の多い魚種は、同じやり方から排除することでよいのか。
- 資源評価のプロセスは何か。結果は公表されているのか。
- 改めて要望するが、日本海のスケトウダラは資源評価の不確実性が大きいので、無理に他の資源と同じやり方の管理に入れないで欲しい。
- 日本海スケトウについては、かつて30万トン以上の資源があったのが、極端に減ってきた。トド、アザラシの海獣の被害が大きく増えてきた。現在も6千頭が来遊。トドの捕食の影響についても、資源評価の精度を上げる努力の中で反映して欲しい。
- 日本海系群はこれから漁獲を抑えることになるが、今後、資源が増加し分布が広がっていった場合、サハリン西岸での漁獲が増えている中で、ロシアのTACが増えれば、適切に管理できないのではないか。行政的にどう考えるか。ロシア側のデータが揃えば資源評価に反映できるが、今は何ら提供されない。
- 太平洋のスケトウダラについても、北方4島の漁獲の情報が少ないが、ロシアから入ってきて漁獲されることがある。期中見直しがないシナリオで、漁業者が漁獲を我慢する事態が危惧される。臨機応変に対応してほしい。
- コロナで延期をお願いしてきた。別に改めて検討会を開くと言われた。確認と、その検討会で、同じ位置づけとすることを確認。
- 10月の検討会で、新たな資源評価が出てくるので、2回目の後に、3回目に開いてほしい。
- 改めて、未利用のTACの繰越をお願いしたい。漁業者はTACを守れば資源が回復すると努力しているが、沿岸では定置・刺網など、待ち網漁業が多いので、TACを

消化しきれない。繰越の制度を検討して欲しい。クロマグロでも国際的約束でできている。次回の SH 会合で方向性を示して欲しい。

- 直近5年間は漁獲を8千、9千、1万トンに固定する、といった試算も考える必要ではないか。。

(7) 進行役より、2日間の議論の総括として、以下を説明。

- ・ MSY とは、漁獲量を最大に維持する概念であり、法律にも定めがあることからその方向性は理解して欲しい。
- ・ 管理基準値の案は、純粹に科学的に計算することになっている。
- ・ 大事なのは、それをどう達成するか。5年か10年か。達成の具体的方法はどうか。その範疇の中で建設的な議論をお願いしたい。
- ・ 日本海のスケトウダラは資源状況が悪く、TAC に加えて自主的管理に取り組んできて、資源は上向きの傾向にある。ただし、MSY の水準を達成するための目標を設定する必要がある、限界管理基準値を現実的に検討していきたい。

(8) 進行役より、第2回会合に向け、以下のとおり、宿題の取りまとめを行った。

研究サイドへの宿題として、

1. 資源評価について、最新の数値を入れた資源評価の結果、管理基準値のアップデート。
2. 日本海のスケトウダラで、漁獲を 8,000 トン、9,000 トン、10,000 トンで、2021 年漁期から 5 年間固定したら、達成確率がどうなるかの試算。
3. 太平洋のスケトウダラで、 $\beta = 0.9$ と 1 の間で、50% を達成できる具体的な β を試算する。
4. 繰越のやり方(当初 TAC の何%まで繰越可能か等)について、(水産庁と道漁連で仕様を詰めた上で、)水研機構で試算・評価を行う。

水産庁への宿題として、

1. 資源評価を踏まえた、具体的な数字を入れた管理基準値案を入れること
2. 漁業者によりよく分かりやすい資料を作ること

以上のように議論を行った結果、第2回検討会では、宿題の回答を行い、具体的な管理について議論していくこととなった。